

花伝書別紙口伝

四

能に十体を得べき事

一、能^{のう}に十体^{てい}を得^うべき事^{こと}。

十体^{てい}を得^えたらん為^し手^ては、同^{をな}

じ事^{こと}を一巡^{ひとまわ}りくづゝ為^すると

も、其^その一通^{ひとと}りの間^{あいだ}、久^{ひさ}し

かるべければ、珍^{めづら}しかるべ

し。十体^{てい}を得^えたらん人^{ひと}は、

其^その内^{うち}の故実^{こじつ}・工夫^{くふう}にては、

〔口訳〕

能に於て十体を得べき事。十体を我身に持ち得た為手であれば、同じことを一巡づつやつて行つても、その一巡の間に相当の年月がかかるから、見物人には珍らしく感じられるであらう。又、能の十体を身に得た人であれば、その十体に様々の工夫を加へるこによつては、その十倍の百色の変化にも涉り得られるであらう。先づ、五年か三年の間に一遍づつ位といふやうに、珍らしく演じ替へるやうなあてがひを持つことが大切である。これは演者として大なる安心立命となるもの

百色にも互るべし。先づ、
五年三年の中に、一遍づ、
も、珍しく為換うる様な
らんずる宛て行いを持つべ
し。これは、大きな安立
なり。又は、一年の中、四
季折節をも心に掛くべし。

である。又、一年の中の四季折節といふものも心にかけて、曲をえらばねばならない。又、数日に互る猿楽では、その各々の一日々々の中は勿論だが、——その数日間に、演ずる風体の種類を、種々と変化あらしめるやうにしなければならぬ。かやうにして、大場の晴の演能は勿論、極めて小規模のものまでも、自然々々に心がけて演じてゆけば、其の演者の花は一生涯散り失せることは無いであらう。

又、日を重ねたる申樂、一日の中は申に及ばず、風体の品々を色どるべし。かやうに、大がうより始めて、些とある事までも、自然く心にかければ、一期花は失せまじき也。

又云、十体を知らんよりは、
年々去来の花を、忘る
べからず。年々去来の花と
は、例へば、十体とは物真
似の品々なり。年々去来と
は、幼かりし時の粧い、初
心の時分の態、手盛りの振

又、「十体を知るよりは、年々去来の花を忘れないやうにせよ」といふ教もある。年々去来の花といふのは、——例へば、十体といふのは、物真似のしなじなをいふのだが——年々去来とは、幼少であつた時代の身なり粧ひ、初心であつた時代の伎、年盛りの時代のふるまひ、年寄の風体など、この時代々々の、自分の身に備はつて居た風体を、皆、現在の自分の芸の中に一度に持つてゐる事をいふのである。それで、或時は稚児か若い者の演能の如くに見え、又或時は年盛りの為手かと思

る舞い、年寄りての風体、
此の時分くの、自と身に
有りし風体を、皆、当芸に、
一度に持つ事なり。或る時
は、児、若族能かと見え、
或る時は、年盛りの為手か
と覚え、又は、如何程も、

はれ、又或時は、随分と臆たけて劫の入つた為手のやうにも見えて、同一人の演能とも思はれないやうな風に演ずるのがよろしい。これ即ち、幼少の時代から老後に到るまでの芸を、一度に我身に持つわけである。それで、「年々に去り来る花」といふのである。

朧^{らう}たけて入りたる様^{やう}に見え
て、同じ主^{ぬし}とも見えぬ様^{やう}に、
能^{のう}を為^すべし。是^{これ}即^{すなは}ち、幼少^{ようせう}
の時^{とき}より、老後^{らうご}までの芸^{げい}を、
一度^どに持^もつ理^{ことわり}なり。さる程^{ほど}
に、年々^{としぐさ}去^{きた}り来^{はな}る花^{はな}とは云
へり。

但^{たゞ}し、此^この位^{くらい}に到^{いた}れる為^し
手^て、上代^{だい}、末代^{まつだい}に、見^みも
聞^ききも及^{およ}ばず、亡父^{ぼうふ}の若盛^{わかざか}
りの能^{のう}こそ、朧^{らう}たけたる
風体^{ふうてい}、殊^{こと}に得^えたりけるな
ど、聞^きき及^{およ}びしか。四十有^{ゆう}
余^よの時分^{じぶん}よりは、見慣^{みな}れし

併し、この年々去来の花を当芸に一
度に持つといふほどの芸位に到達した
為手は、前代にも末代にも、見及ば
ず聞き及ばないのである。亡父観阿弥
の若盛りの時代の能は、朧たけた風体
を殊に得たものであつたなどと、評判
を聞き及んでゐる。四十有余歳以後
からの能は、自分も常に見て居たから
間違はない。自然居士に扮しての演能
で、高座に上つての振舞など、その頃
の見物の人々は、十六七歳の若々しい
身体に見えたなどと評判したものであ
る。これは正しく他人もかく言ひ、自

事なれば、疑い無し。自然
居士の物真似、高座の上に
ての振る舞いを、時の人、
十六七の身体に見えしなん
ど、沙汰有りしなり。此は
正しく人も申し、身にも見
たりし事なれば、此のくい？

分もそれを現に見たのであるから、亡父はこの位（年々去来の花を一身当芸に持つといふ芸位）に相応した所の達者であらうと感じたのである。かやうに、若い時代には将来の年々去来の風体を持ち、年寄つては、若い時代の風体を自身に残し持つてゐるといふ為手は、父以外には一人も見も及ばず聞きも及ばないのである。

に相応したりし達者かと覺
えしなり。かやうに、若き
時分には、行く末の年々去
来の風体を得、年寄りては、
過ぎし方の風体身に残す為
手、二人とも、見も聞きも
及ばざりしなり。

されば、初心よりの以来
の、芸能の品々を忘れずし
て、其の時々用々に従て取
り出すべし。若くては、年
寄りの風体、年寄りては、
盛りの風体を残す事、珍し
きにあらずや。然れば、芸

かやうなわけであるから、初心の時
代からの芸能の品々を忘れず身に持つ
て、演ずる場合々々に必要に応じて、
これを取り出して演ずるやうにすべき
である。若年の時代には、老後の風体
を持ち、老後に於ては年盛りの時代の
風体を身に残し持つといふことは、珍
らしいといふ感を生むものといふべき
である。だから、芸の年劫を経て位が
上ると、今までの風体を為捨てて忘れ
るといふことは、これ全く「花の種」
を失ふといふことになる。その時代々々
の花を咲かすだけで、花の種を失つて

能の位上がれば、過ぎし風
体を為捨てゝ忘るゝ事、
只管、花の種を失ふなるべ
し。其の時々有りし花の
儘にて、種無ければ、手折
る枝の花の如し。種有らば、
年々時々の頃に、などか逢

は、まるで手折つた枝の花と同様で、
再び咲くことは全く無い。花の種さへ
あれば、年々時々の咲く頃には、必ず
花が開くわけである。ただ返す返す
も初心を忘れてはならない。それで、
常々よく聞く批判の言葉にも、若い為
手を誉める時には、「早く芸が上つた」
とか、「劫の入つた芸だ」などといひ、
老年の為手をほめては「若々しい芸だ」
などといつて批評するのである。これ
は、「珍らしさ」・「意外さ」といふも
のを、人々が賞美する道理のあらはれ
でなくて何であらう。前に述べた能の

はざらん。唯返すぐ、初

心を忘るべからず。されば、

常の批判にも、若き為手を

ば、早く上がりたる、劫入

りたるなど誉め、年寄りた

るをば、若やぎたるなど、

批判するなり。これ、珍し

十体をいろいろに工夫し色どりかへれば、百色にもなるであらう。その上に、年々去来の芸風の品々を、一身当芸に持つてゐたならば、其の芸の花は如何に夥しいものか、一寸計り知れぬほどの花の主となるわけである。

き理ならずや。十体中を、

彩らば、百色にも成るべし。

其の上に、年々去来の品々

を、一身当芸に持ちたらん

は、如何程の花ぞや。

此の段は、二つの事項をのべて居る。一つは「能に十体を得べき事」、

他の一つは「年々去来の花を持つべき事」である。而して、その二つの条項をまとめるものは「能の花を数多く持つ」といふ所へ帰着してゆく世阿弥の意見である。この別紙口伝は「花」といふものを、様々な角度から詳説したものであり、すべての議論は、結局「花」に統一されて居るといふことを念頭に置いて読む時、この段の意味する所は極めて明瞭に理解せられると思ふ。

* 十体については、語釈の条に於て述べたやうに、その個々の名目は今日
は不明であるが、あらゆる基、本的、風体、を総括したものと考へて良いで

あらう。それは「十体を色どる」といふ語から考へられる所である。例へば、老体といふのは一の基本風体であるが、その色どりによつて、高貴な老体、神の化身の老体、木こり炭焼の老体、船頭の老体などと、様々な特殊な老体に分れてゆく。少くとも、老人面が、小牛尉、笑尉、皺尉、朝倉尉、舞尉、石王尉などといふ型に分れたのも、この色どりの変化に應ずるわけであつたと思はれる。くはしく分ければ、老人出現の曲は、各曲に於て、その老人そのものの色どりが相違するものといひ得るであらう。今日では、大体、面の種類と其の装束との組合せによつて、老人の色どり方の種類をほぼ定めてゐるやうである。女体、軍

体等もこれと同じことが言ひ得られる。

「五年三年の内に、一遍づつも、珍らしく為替へる様ならんずるあてがひを持つべし」といふ語は、様々な事を我々に暗示する。同一の能は、五年目か三年目かに、珍らしく感ぜしめて、一遍づつ位演ずるやうにせよといふことは、一面から考へると、その長い年月の間に、同一の能を反覆しないでもすむやうに、多くの能数を持つやうの工夫をせよとの教訓でもあり得る。又他面から考へると、世阿弥をしてかく言はしめる程に、当時の能の曲数は夥しくあつたものではなからうかとも考へさせ

られるものがある。そして、かく多くの能を身に持つ事は、演者として能芸に安心立命を得しめるもの——如何となれば、花の種が尽きる心配がない故——であつたのである。

「年々去来の花」といふ言葉は、実に巧妙な言葉である。「人間各時代の特殊的芸風」とでも今日の人であれば言ふであらうが、それを極めて簡明にしかもわかり易く、かやうな術語であらはした言葉づかひに私は感心させられる。年若き時代に、年寄や年盛りの人の風体を身にそなへるといふことは、一寸普通の者には困難であるかも知れない。

が、年寄りが、若い初心時代の風体や年盛りの風体を、忘れずして身に保つといふことは、努力の仕方によつては可能であらう。ただ、その時々
の風体ばかりをして、過去の風体を仕捨てて顧みないといふのは、所謂
「手折れる枝の花」で、まことに果敢なく惜しいわけである。この年々
去来の花を、一身当芸に持った為手は、亡父観阿弥ならではの二人と見
及ばなかつた云々の語は、一面に観阿弥の名人であつた事を我々に告げ
ると共に、又他面には、当時の猿楽者の演ずるものが、年齢と共に変つ
て行つたといふ様子を、我々に物語るものではあるまいか。

即ち、世阿弥時代には、若年時代には年若き人物に扮する能を、老
年には老年の人物に扮する能をといふ風に、曲の選び方が、其の年齢と
大体一致するといふのが原則的に考へられて居たのではあるまいか。そ
れは、年寄つては、年若き能をするもをかしいといふ考を、他にも世
阿弥は述べて居ることからも推測せられるかと思ふ。然るに、観阿弥は
老年になつて、尚十六七に見えるやうの能を演じ得たといふのが、非常
に珍らしく感ぜられたのであらう。今日に於ては、老年の為手が、若
公達に扮する能を演じて、自然居士や花月の如き童子ものを演じて
も、少しも奇異に感ずるものは無くなつてゐる。これは、今日の役者

が、年々去来の花を持つやうの修行をする習慣が出来てゐる為であらう。そして、これは曲数が大体二百番前後に限定せられ、大夫たる者は、何れの曲を望まれても、即座に演じ得られるやうな修行をつむべく定められた結果であらう。それに比べると世阿弥の時代は、どしどし新曲を作る時代であつたから、能を作る際には、その役者の年齢や芸風に応じたものを作るといふ風であり、従つて年齢相応のものを演ずるといふのが、当時の慣習ではなかつたかと思はれるのである。そして、かやうにして演ずる能は、いはばその時代限りで捨てて、再びこれを老後に演ずるといふやうな事は、あまりやらなかつたものかと考へられるのである。

ある。

*十体——これは文中に、「十体とは物真似の品々なり」とあるから、物真似の風体に関するものである事は明瞭であるが、十体とは何々を指すかといふ名目の問題に関しては、世阿弥は何とも言つて居ない。物学条々には、老人・女・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事の九項目があげられてゐるが、これを十体といふことは少し無理のやうである。禅竹の「拾玉得花」には、祝言・幽玄・恋慕・哀傷・闌・麗体・遠白体・濃体・有心体・事可然体の十体があげられてゐるが、これは、歌舞髓脳記や五音三曲集を参照することによつて、歌道思想を能楽論の中に取り入れた禅竹の考案になるものである事を知り得るから、この別紙口伝の十体を、禅竹のそれを以て考へることは慎まねばならない。又、金春流の伝書「風口」といふ書に、世阿弥の十体としてのせられた「十体の次第」なるものには、祝言の心・幽玄の心・恋慕の心・哀傷の心・田夫野人の心・神祇の心・仏前の心・無常の心・述懐の心・仁義礼智信の心といふ名

目があげられてゐるが、これ等は、更に世阿弥の意を去ること遠きもので、問題とはならない。それで結局十体の名目は不明とするのが最も妥当であらう。これは香西精氏の意見の如く、物真似の各体を大凡に引くるめて、十といふ文字を以て示し、十体の名を以て、主要な物真似風体全部を包括したものと見るのが、最も穩健な意見だと私は考へてゐる。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著